

広島大学大学院  
放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム  
第1回グローバルフィールドビジットを実施しました

平成27年1月12日（月）から16日（金）に、ベラルーシ共和国を訪問し、第1回グローバルフィールドビジットを実施しました。

行程では、ベラルーシ医科大学やゴメリ医科大学を訪問し、チェルノブイリ原子力発電所事故に起因した甲状腺がん調査や内部被ばく検査について学習しました。また、ゴメリ州チェチェルスク郡中央病院と同病院が管理する郊外の診療所を訪問し、地域医療の体制を学習するとともに、幼少期にチェルノブイリ原子力発電所事故後の放射線被ばくを受けた方々の経時的な内部被ばく調査の現場を見学しました。

また、各所を訪問した際の意見交換の中で、「若い学生にはベラルーシが蓄積した医学分野の経験を福島原子力発電所事故からの復興に向けて役立ててほしい。」「復興には農業の復興も非常に重要である。ベラルーシの新しい農業システムも福島復興の参考になるのではないか。」「医療面や環境面での問題も重要であるが、地域コミュニティーや子供・親の心理的な問題に取り組むことは大切な課題である。非常に難しい課題であるが是非取り組んでほしい。」といった旨のコメントがあり、参加した学生にとって非常に有益であるとともに、分野横断的学修の重要性を再認識しました。

なお、本グローバルフィールドビジットは、プログラム担当者である長崎大学高村昇教授の協力のもと実施しました。



チェチェルスク郊外の診療所



ホットスポットには立入禁止の看板が設置